

大相撲の興行



* 御園生翁甫文庫224「防長史料3」にある龍門由五郎の手形。御園生翁甫が大正年間に周防大島で現地調査した際に写しとったものです（下は筆者の手）。

解説

相撲は古代以来の長い歴史をもっています。江戸時代の相撲興行は京・大阪・江戸の勧進相撲（社寺の造営等の費用を捻出するための興行）として始まり、やがて定期的に行われ、番付のしくみも整いました。江戸では深川の富岡八幡宮、ついで両国の回向院で本場所が行われました。

写真は、富岡八幡宮の「巨人力士身長碑」に歴代4位の長身（7尺4寸5分＝約226cm）として刻まれている、周防大島出身の「龍門由五郎（好五郎・芳五郎）」の実寸手形です。彼は1828（文政11）年にはいわゆる「看板力士」（実際に相撲は取らず、その巨体で観衆の耳目を集める力士）でしたが、地元には数々の巨漢・怪力伝承が残っています。

相撲は庶民に大人気で、大名たちは競って有名力士を抱えました。現在も残る大相撲の「阿武松（おうのまつ）部屋」は、相撲を好んだ毛利氏が抱えた横綱阿武松緑之助を初代とする部屋で、「阿武松」は長州の萩にちなむしこ名です。1828年秋の回向院での番付表では、長州藩は阿武松のほか、関脇岩戸山、前頭1枚目越ヶ浜を抱えていました。

* 由五郎の手形は、このほか内田家文書（防府市）2384・2794にもあります。

* 当館の龍門由五郎の関連資料としては、手形のほかに御園生翁甫文庫263「防長史料42」（防長の巨人の列伝）、旧藩別置記録 大島宰判本控2などがあります。